

老人介護

二次使用禁止

今年4月1日に施行された「介護保険制度」。しかし複雑な制度の内容、地域格差、財源の確保など、多くの問題点が指摘されている。介護保険では40歳以上が被保険者となるが、なかでも65歳以上は「第1号被保険者」とされ、その人口は現在2200万人を数える。少子化が進み、さらに深刻化が予想される高齢化社会のなかで、誰がどのように高齢者の生活をケアするのか。「老人介護」の現場に迫った。

自宅で介護をする場合、介護をする側も高齢化している。栃木県壬生町の宇井俊一さん(91歳)は、寝たきりの妻・久さん(92歳)の面倒を見ているが、このように介護する側も高齢者というケースの割合は50%を超えている

「かあさん、おかゆだよ。」前ページのように話しかけ、宇井さんの朝の日課は、久さんの食事の世話から始まる。久さんはアルツハイマー病と大腿骨の付け根を骨折したため、この10年間寝たきりである。「栄養をつけて、元気になってほしい」とひと口ずつ久さんの口許へと運ぶ。食べ終わるまで1時間以上かかる。午後からは託老所「のぞみホーム」に久さんを預けに行くが、実は、この施設を開設したのは宇井さん自身だ。「町には妻を預ける施設がなく、定員に余裕のあった隣市の施設を越境利用していましたが、市外者という理由ですぐに追い出されてしまった。困り果てて、同じような境遇の家族と協力して、ここをつくったんです」。午後からは自分の時間が持てるようになった宇井さんだが、一緒に施設に行くと、愛妻の傍らですこす時間が一番多いという

寝たきりの妻の 世話をする 老人の10年間

二次使用禁止





介護は、心身共にぼろぼろに疲れ切ってしまうほどの難事である。それを家族、とりわけ長男の嫁にのみ任せるのは不可能である。世間のお世話になりたくない」などと遠慮する必要はない。皆に助力を求めるべきであり、これが「介護の社会化」につながる。「介護はプロに、家族は愛情を」というスローガンを現実のものにせねばならぬ。誰もが大金持ちであれば、人を雇って介護をさせれば済む。しかし、この不況のご時世である。しかも、親が倒れるとき、子は中高年になっており、住宅ローン、教育費と物いりが多い。1円でも惜しいときに、親の介護費用を負担せよ、と突然言われても困るのである。だから、この費用分担について兄弟の諍いが起こる。都会に住む次男が田舎に帰って親の顔を見たくても、長男に金を要求されるのが怖くて躊躇している。

介護保険は、以上のような問題への一つの答えであるが、これで十分ではない。高福祉を求めるなら、高負担である。政府や社会に頼らない自力救済は不可能と心得るならば、消費税を増税し、福祉目的税化して財源を作ること考えてもよいのではないか。ここでも、問われているのは政治のリーダーシップである。

禁使用



「高齢者はいつまでも夢を見ながら、輝く星（スター）のような存在であってほしい」と語るのは、今年2月、JR西立川駅前に老人保健施設を開設した中島義治理事長。その理念通り「スターホーム」（東京・立川市）と名付けられた施設は、明るく開放的で、リゾートホテルのような雰囲気である。設計時に最もこだわったのが入浴の設備。温泉施設のような広い浴槽には、体の不自由な人でも車椅子のまま入浴できる装置が3台設置されており、「手足を伸ばしてゆっくり湯船につかれる」と入所者に好評だ。「入所生活が楽しめるように、カラオケ大会などのイベントにも力を入れています」（中島理事長）

「介護はプロに、 家族は愛情を」を 躊躇することなく 現実化しよう

舛添要一（政治学者）

介護をめぐる問題は、（一）誰がするのか、（二）誰が費用を払うのか、という二つに集約できる。この二つの問題が解決しないから、日本の各地で、痴呆症の親を殺して自分も自殺するという悲劇が繰り返されているのである。

入浴サービスが充実した
明るく開放的な施設



少人数の痴呆症老人を預かる 「グループホーム」

二次使用禁



最年長の94歳の男性は、
毎晩2合のお酒を飲む
ほど元気なのが、耳
が遠いため筆談でコミ
ュニケーションをはか
っている

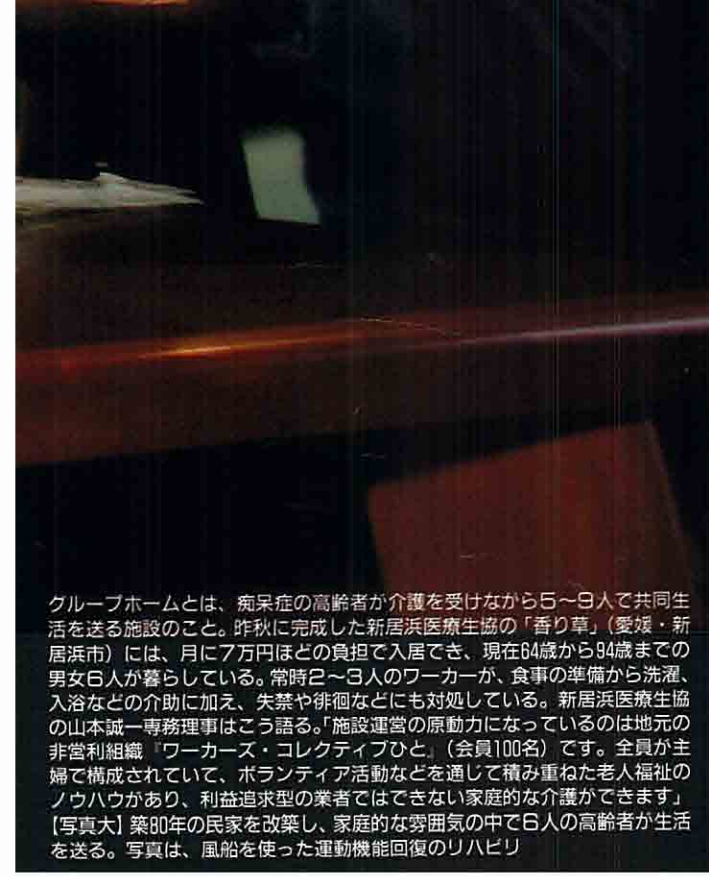


アルツハイマー病の男性（76歳）のトイレ介助。足腰はしっかりしているが、一人では用が足せないため、ワーカーの手助けが必要となる



就寝の準備をする88歳の女性（手前）。夫婦で老人ホームにいたが、いじめに遭っていたという。ここに移ってその悩みから解放された

禁 用 二 次 販 売



グループホームとは、痴呆症の高齢者が介護を受けながら5～9人で共同生活を送る施設のこと。昨秋に完成した新居浜医療生協の「香り草」（愛媛・新居浜市）には、月に7万円ほどの負担で入居でき、現在64歳から94歳までの男女6人が暮らしている。常時2～3人のワーカーが、食事の準備から洗濯、入浴などの介助に加え、失禁や徘徊などにも対処している。新居浜医療生協の山本誠一専務理事はこう語る。「施設運営の原動力になっているのは地元の非営利組織『ワーカーズ・コレクティブひと』（会員100名）です。全員が主婦で構成されていて、ボランティア活動などを通して積み重ねた老人福祉のノウハウがあり、利益追求型の業者ではできない家庭的な介護ができます」
【写真大】築80年の民家を改築し、家庭的な雰囲気の中で6人の高齢者が生活を送る。写真は、風船を使った運動機能回復のリハビリ



受講希望者が殺到する「介護サービス」講座

労働省所管の特殊法人、雇用・能力開発機構では離職職者の再就職訓練を行っているが、現在、介護サービス科の講座が大人気だ。「ポリテクセンター関東」（神奈川・横浜市）で行われる同科の4月生は、定員20人の募集に260人の応募者が殺到。難関を突破した元教師の男性（23歳）は受講の動機を「トイレの介助を女性に受けるのは恥ずかしいという男性もいます。介護の現場には男性の力も必要はず」と語る。受講期間は6ヵ月で、ホームヘルパー1級の資格が取得できる

人口約5500人の5割が65歳以上の高齢者で占められ、高齢化率日本一の町である山口・東和町。高齢者のうち約800人が独り暮らしだ。「毎日給食」は、同町の社会福祉協議会が独居老人への在宅サービスとして始めた事業で、毎日昼食を届けるとともに、配食時に安否を確認するのが目的である。給食作りや配達は元気な高齢者の役目で、82歳の亥川鶴枝さん（写真中央）は、毎朝5時に起きて弁当を詰める仕事を手伝い、配達までこなす。その後9時には畑に戻って野菜作りをする

高
齢
化
率
自
本
一
の
町
老
人
が
老
人
を
助
け
る





老人介護

屋間だけ介護が必要な人を預かり、食事や機能訓練を行うデイサービス施設「あすなろみんなの家」（東京・あきる野市）には、保育園が同居している。お年寄りと子供の交流が目的で、互いの部屋を自由に往来できる。「痴呆老人が失禁しても隠したりしません。子供たちに老いの現実を知ってもらいたいから」と今キヨ子園長。核家族化が進んだ都会っ子にとって、いい社会勉強だ。痴呆の高齢者も、子供たちの相手をするこゝでハビリ効果が期待できる

「老いの現実」を間近に見る子供たち 「新しい家族」との生活を選ぶ高齢者の家

この4月に完成した「たのしい長家」（北海道・旭川市）は、72歳から85歳まで11人の高齢者が共同生活を送っている。家賃は日食付きで月額7万5000円。食堂や浴室、便所は共用で、ホームヘルパーの資格を持ったスタッフが、食事の支度や入浴の介助など身の回りの世話をする。「入居者のほとんどが要介護認定者ですが、お年寄り同士が助け合いながら、家族として生きていく場所。今後は、福祉学校の学生など若者を入居させて、世代を超えた交流をはかりたい」（山本隆代表）

